

令和元年9月4日現在

機関番号：32705

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K04089

研究課題名(和文) 養子縁組家族において育つ子どものアイデンティティ形成に有意義な支援モデルの検討

研究課題名(英文) How should we support about identity formation of adopted children?

研究代表者

富田 庸子 (TOMITA, YOKO)

鎌倉女子大学・児童学部・教授

研究者番号：10288102

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)： 養子縁組によって乳幼児期から育て親のもとで育ち成人した子どもたちに半構造化インタビュー調査を行って、アイデンティティ形成に有意義な支援のあり方を検討した。その結果、子ども本人の心理社会的発達に伴う視野の広がりを基盤として、テリング(産みの親の存在や子どもの出自に関わることがらを日常の中で子どもの発達に応じて伝え続けること)の有効性、縁組成立後も産みの親側との交流を継続することの効果、育て親の受容的・共感的態度の重要性などが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

子どもの権利条約は、子どもが親を知り、自分のアイデンティティを保持する権利を保障している。欧米では、子どもの発達にとって有益であるとの観点から、縁組成立後も育て親家族と産みの親側とが交流するオープンアダプションが広がっている。わが国において、血縁のない親子関係で育つ子どもたちのアイデンティティ形成にテリングや産みの親との交流継続が与える影響を検討した本研究は、多様な親子・家族に関わる法律的・福祉的展開につながる有意義な示唆を提供する。

研究成果の概要(英文)： The present study was undertaken in order to give a light to the discussion of how we should support about identity formation of adopted children.

Approved Specified Nonprofit Corporation WA-NO-KAI promotes open adoption and advises the adoptive parents on "telling". "Telling" is defined as continuous efforts by adoptive parents to help adopted children understand the existence of their biological parents and pertinent information about their origins. With the cooperation of WA-NO-KAI, seventeen adoptees who had been adopted in infancy and grew up over 20 participated in semi-structured interviews.

As a result, "telling" from infancy and the continuation of interaction with the birth family after adoption support children to make their identity based on their psychological and social development. In the same way, the adoptive parents' unconditional positive regard or acceptance always support their children.

研究分野：発達心理学

キーワード：養子縁組 縁組支援 ライフストーリー テリング アイデンティティ 社会的養育

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

国連子どもの権利条約は全ての子どもが家庭環境において育つ権利を謳っている。永続的な生活環境や人間関係を保障するパーマネンシーケアが重視される中、産みの親のもとで育つことの出来ない幼い子どもの養子縁組の推進と発達支援は、日本社会が取り組むべき重要な課題である。

子どもの権利条約は、子どもが親を知り、自分のアイデンティティを保持する権利を保障している。欧米では1980年代以降、血縁がないことを事実として受け入れ産みの親の存在を否定しないことが子どもの発達に有益であるとの観点からオープンアダプション(縁組成立後も育て親家族と産みの親側との間に何らかのコミュニケーションが継続する縁組)が推進されている。真実を「隠す」傾向が強かった日本の養子縁組においても、近年は子どもに真実を伝えることの重要性が認識されている。しかし多くの育て親が伝えることに戸惑いを感じている。また、子どもを育てる義務を果たせない母親は産むべきではないという社会規範が強く、予期せぬ妊娠の責任を取る方法として、子どもの命を守る養子縁組よりもむしろ中絶が想定されている。そもそも日本では、幼い子どもの養子縁組が欧米に比べてたいへん少なく、オープンアダプションの効果やそこで育つ子どものアイデンティティ形成についてほとんど検討されていない。

このような日本にも、20年以上にわたって300人を超える子どもと育て親とのオープンアダプションを支援してきた民間機関がある。認定NPO法人「環の会」では、子どもの出自を知る権利を守り親子の信頼関係を築いていくため、テリング(産みの親の存在や子どもの出自に関わることがらを日常の中で子どもの発達に応じて伝え続けること)を重視している。産みの親は子どもの命を守りぬいた存在として尊重され、縁組成立後も環の会を通じて育て親家族との交流を続けることが可能である。

申請者はこれまで環の会の協力を得て育て親たちの調査を行い、育て親たちにとって有効な縁組支援のあり方について検討してきた。その結果、

- (1) 育て親にとって、子どもが幼い頃からのテリングは何でも話せるようになるための練習としての側面を持ち、子どもが理解できるかどうかは別にして、伝え続けることそのものに意味が見出されていること。
- (2) 育て親は、子どもが幼いうちからテリングするからこそ「理解できるだろうか」「傷つけるのではないか」といった不安が少ないこと。
- (3) 育て親は、産みの親の存在を受け入れることが子どものありのまますべてを受け入れる大前提だと考えていること。
- (4) 育て親のテリングに関する不安は、産みの親との交流が保たれることによって軽減される傾向があること。

などを見出してきた。環の会での縁組を選んだ育て親にとって、環の会の縁組支援のあり方が有効であることは確認できたといえるだろう。

では、子どもにとってはどうなのだろうか。環の会の活動が20年を超え、成人する子どもたちが増えてきたことから、いよいよ子ども側の認知に迫る研究が可能となった。欧米ではもはや一般的な、テリングや産みの親との交流といった縁組支援のあり方は、果たして日本で育つ子どものアイデンティティ形成に有効といえるのか - 子どもたちに真に必要なとされる縁組支援モデル構築の基盤を得るために、本研究を着想した。

2. 研究の目的

乳幼児期の養子縁組によって育て親のもとで育ち成人した子どもたちが、生き立ちについての理解を深めアイデンティティを形成していくプロセスにおいて

- (1) テリングは、実際にどのような影響をもたらしたのか。また、より良い効果をもたらすためには、どのような支援が必要なのか。
- (2) 産みの親との交流は、実際にどのような影響をもたらしたのか。また、より良い効果をもたらすためには、どのような支援が必要なのか。

上記2点を検討し、テリングや産みの親との交流についての子ども自身の評価をもとに、子どもの最善の利益につながる縁組支援に役立つ知見を獲得する。

3. 研究の方法

構造構成的質的研究法(西條、2007、2008)をメタ研究法として、質的研究を行った。環の会の仲介によって乳幼児期に養子縁組し成人した77名に参加を呼びかけ、応じてくれた17名(男性7名、女性10名)に対して研究目的に基づく半構造化インタビュー調査を実施した。具体的には、テリングや産みの親との交流の経験、生き立ちの理解に影響を与えた印象的な出来事などについて、それらに付随する感情や考えと共に幼少期から現在に至る時系列に沿って回想しながら語ってもらった。また、産みの親、育て親、家族、自分自身について現在どのように感じているか、テリングや産みの親との交流という方法をどのように評価するか、こうした方法がより良い効果をもたらすためにはどのような支援があればよいと考えるか、などについて尋ねた。

各インタビューに要した時間は最短1時間59分~最長3時間37分であった。インタビューは調査参加者の了解を得て録音し、書き起こしてテキスト化した。得られた各々のライフストー

リーについて、佐藤（2008）を参考に質的分析を行った。

本研究の実施については、鎌倉女子大学研究倫理委員会で承認を得ている（承認番号：鎌倫-14015）。調査参加者には研究目的や方法、結果の公表、個人情報の保護や協力の任意性などについて説明し、同意を得ている。

4. 研究成果

調査参加者 17 名全員がテリングを経験していた。内 15 名は乳幼児期からテリングされており、2 名は小学生時代に初めてのテリングが行われていた。縁組成立後も産みの親との交流が行われていたのは 8 名であった。

子どもひとりひとりが実際に経験してきたテリングや産みの親との交流の様態、感情や認識の変化を明らかにするために、個々のライフストーリー分析を進めたところ、多様な個性が確認された。

主要な成果の一例として、春菜さん（仮名）のライフストーリー分析結果の概要を記述する。春菜さんは、新生児期に育て親に迎えられ、迎えられたその日からテリングを受けて育ち、産みの親とのプレゼントや手紙のやりとり、面会などの交流が継続している。

(1) 生い立ちに関わる理解の時系列的深まり（図 1 参照）

新生児期からテリングされていた春菜さんにとって、迎えられたことは【いつの間にか知っていること】【あたりまえのこと】だった。幼稚園時代に【周囲とは違うこと】だと気づき、小学生時代には徐々に【特別な目で見られること】【周囲には話しにくいこと】【かわいそうだと思うこと】だと認識するようになった。大学生になり、自分にとってはずっとあたりまえのことが現実社会では【特別なこと】【幸運なこと】でもあったのだと認識するようになっていく。

産みの親については、テリングによって、物心ついた時にはすでに【産んでくれた人】【存在する人】ではあったが、実像を伴わない【遠い人】だった。5 歳で面会し【実在する人】になった。その後の継続的なプレゼントや手紙のやりとりを通じて【やさしい人】として【感謝】を感じつつも【愛情に実感がもてない】ままであった。しかし高校 3 年生で再会し、自分と【似ている人】だと感じ、また、産みの親の思いを直接聞くことによって【ずっと愛してくれている人】だと確信した。産みの親は産みの親であり「母ではない」が、【人生そのものをくれた人】だと認識し、感謝、尊敬、愛を感じている。

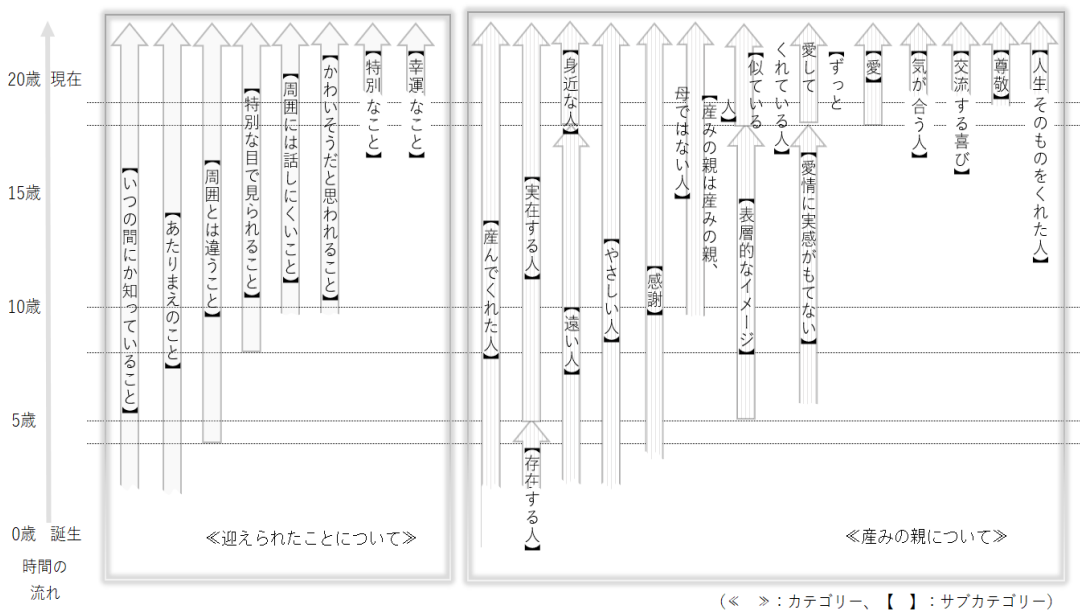


図1 生い立ちに関わる理解の時系列的深まり

育て親については、【人間力がある人】として語られた。幼い頃から一貫して【話してくれる人】【聞いてくれる人】であり、愛、感謝、信頼、尊敬を感じている。自分の育った家族については、不満や葛藤も含めて、血縁はないが【普通】の家族であり、【今の家族が私の家族】だと確信している。

(2) 生い立ちに関わる理解の深化とアイデンティティ形成に寄与した要因

迎えられたその日からの日常的なテリング

春菜さんは、迎えられた子どもの立場から「テリングは必ずしてほしい」と考えている。「テリングしてもしなくても、本当のことは変わらない。それを受けいられるかどうかの違いであって、テリング自体はあたりまえ。親に隠されたり嘘をつかれたりする事のほうが絶対に嫌だ」

という認識は他の調査参加者にも共通しており、生い立ちに関する理解の土台を【あたりまえのこと】に置けるように、早期からの自然なテリングが子どもの立場からも有効であることが示唆された。

子どもと産みの親、双方にとってタイミングのよい交流

春菜さんは「子どもの立場からは産みの親に関わり続けてもらったらうれしい」とした上で、重要なのは双方にとってのタイミングだと考えていた。春菜さんの産みの親理解に大きな影響を与えたのは、直接会うことだった。5歳で産みの親と面会してその存在を実感し、表層的だが肯定的なイメージを保持して成長し、高校生で再会して生物学的なつながりを感じると共にその思いに直接触れたことが、春菜さんの産みの親理解やアイデンティティ形成において有効であった。

育て親の受容的・共感的態度

春菜さんは、産みの親の詳しい事情や生物学的な父親のことは全く知らないが、不安や葛藤をほとんど感じることなく育った。その最大の理由は、すべてを受けとめてくれた育て親の態度であると考えていた。従来の研究によって明らかにされているとおり、子どもの自尊心の育ちに養育者が重要な役割を果たすことが、春菜さんのライフストーリー分析においても確認された。

心理社会的発達に伴う視野の広がり

春菜さんは、幼い頃はまずテリングを通じて育て親の認識を取り入れ、成長するにつれてそれとは対照的な周囲の人たちの認識を知り、さらに予期せぬ妊娠に悩む女性や産みの親と暮らせない子どもたちの現状など、より広い世界から得た情報を自分の生い立ちにつなげて意味づけていった。子ども本人の心理社会的発達に伴う視野の広がりが、生い立ちに関わる理解の深化の土台となることが確認された。

調査参加者の中には、育て親との関係に問題が生じたり、肯定的な産みの親像を獲得できずに生い立ちに関わる葛藤を抱える場合もあった。研究期間中は、新たに成人してインタビュー対象となる調査参加者への影響を考慮して研究成果の公表を限定的に行ってきたが、今後、子どもひとりひとりのライフストーリー分析から得られた成果を論文発表するとともに環の会のホームページなども活用しながら広く公表し、子どもたちに真に必要なとされる縁組支援モデルの構築と実践につなげていきたい。

<参考文献>

- 西條剛央、新曜社、ライブ講義・質的研究とは何か：SCQRM ベーシック編、2007
- 西條剛央、新曜社、ライブ講義・質的研究とは何か：SCQRM アドバンス編、2008
- 佐藤郁哉、新曜社、質的データ分析法：原理・方法・実践、2008

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1件)

富田庸子、特別養子縁組で育つ子どもの生い立ちに関わる理解の深化とアイデンティティ形成 - 春菜さんのライフストーリー -、臨床発達心理実践研究、査読有、第14巻、2019(印刷中)

〔学会発表〕(計 2件)

富田庸子、養子縁組家族で育ち成人した「子ども」のライフストーリー - テリングの効果についての探索的検討 -、日本発達心理学会第30回大会、2019

Yoko Tomita, Telling the adopted children in nonbiological families about their origins., 31st International Congress of Psychology(ICP2016)、2016

〔図書〕(計 1件)

柏木恵子・高橋恵子(編)、富田庸子、ちとせプレス、人口の心理学へ - 少子高齢社会の命と心、第4章 血が繋がらない子どもの親になる - 特別養子縁組による親子の形、2016、pp.87-102

〔その他〕

絵本の出版

鎌倉女子大学「家族のつながり」ゼミナール、ちとせプレス、ふたりのおかあさん、2019

6. 研究組織

(1)研究協力者

研究協力者名：星野 寛美

ローマ字名：(HOSHINO, Hiromi)

研究協力者名：木下 佳子

ローマ字名：(KINOSHITA, Yoshiko)

研究協力者名：北村 裕子

ローマ字名:(KITAMURA, Yuko)
研究協力者名:西田 知佳子
ローマ字名:(NISHIDA, Chikako)
研究協力者名:松本 浩美
ローマ字名:(MATSUMOTO, Hiromi)
研究協力者名:行光 嗣子
ローマ字名:(YUKIMITSU, Tsugiko)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。